

# 全油販連会員の会社紹介

## 島商株式会社

創業 1716 年 植物油脂卸売業、自然健康食品・グロサリー品卸売業、不動産管理業を営む。

### 島商株式会社沿革

#### 江戸時代 ; 創業

安永年間より代々屋号を「山十・島屋新助」と称し、嘉永 4 年(1815 年)の旧幕引継諸「諸問屋名前帳」には、日本橋小網町「住吉荒物問屋」「通町組小間物問屋」「島屋新助」と記録されている。島商株式会社は、過去帳によると、延享元年(1744 年)武蔵屋吉右衛門から始まっているので、創業は享保年間に遡ると推定される。

#### 明治時代 ; 油・荒物販売

明治 31 年刊の「日本商工営業録」には「油・荒物・島屋」として載っていることから、明治時代から油専門問屋になったと推測される。伝馬船で小網町河岸に運ばれた荷は、関東一円に売られていた。

#### 大正時代 ; 関東大震災の悲劇

大正 6 年、ライジングサン石油(後のシェル石油)の販売組合「東京貝印揮発油組合」の設立に参加。同年「竹本油脂株式会社」、後に「日清製油(現、日清オリオグループ株式会社)の特約店となる。竹本油脂の売約帳に「山十商事貨車〇〇台」の注文が残っている。



「...からしい。ソリメンなど、  
「...によって扱ったのだが、冬  
ると、二つの倉庫を一ぱいに  
また、普賢な經營ぶりだっ  
る。」

大正 12 年、関東大震災で家族・店員の殆どを失う。たまたま別邸にて宿題をやっていて助かった増次郎(当時 18 才)が大学を卒業後、九代目を継ぎ事業を再興する。

#### 昭和 ; 石油と共に歩む

昭和 16 年、第二次世界大戦の統制強化に伴い、石油・油糧配給公団の指定店となり配給業務に専念する。後に「合資会社島田新助商店」になり、菜種油、胡麻油、椿油、小麦粉、蕎麦粉、澱粉などを扱っていた。昭和 20 年東京大空襲で焼失した小網町の店・倉庫を再建し、シェル石油、日清製油、竹本油脂の特約店として再出発する。昭和 31 年東部興業(現・東部ケミカル)設立、シェル化学製品の卸売りを主業務とする。昭和 39 年社名を 島商株式会社に変更。昭和 41 年、(株)シェルガーデン設立(株主:シェル石油、島商、国分) 後、10 代目島田孝克が経営に参画、島商を継ぐ。事業拡大も行うが、1996 年には石油部門を売却。



創業当時のシェルガーデン

平成～現在

平成元年、本社ビル CANAL TOWER(キャナルタワー)新築落成、オフィスビル賃貸業を開始。

2012年第11代目代表取締役社長に島田豪就任。コーポレートロゴを変更し、ホームページやパンフレットなど一新。次のステージへ。



現在；油の啓蒙活動

オリーブ(オリーブオイル)ソムリエ取得 幅広い分野でセミナーを開催し良い油の普及活動に努める。食育活動の実施や、レストランで食のイベントも開催。



バジル栽培し、バジルを取って、バジルペーストを作る会 with olive oil



小売業の遺伝子と油のノウハウを生かし、商品開発と販売を行う。

12/2 日経 朝刊

13 新興・中小企業 12版

【第三種郵便物認可】

東京証券取引所のある日本橋兜町や日本橋茅場町と、川をはさんで向き合う日本橋小網町。江戸時代から1923(大正12)年の関東大震災まで、白い蔵がずらりと並び、さまざまな物資を船から荷揚げする流通センターだった。

享年共同(1716〜35年)に創業し、現在はごま油などの植物油や調味料を卸売りする島商(東京・中央)は、小網町の発展とともに事業を拡大。江戸期から油、しょうゆ、酒や日用雑貨を商った安永年間(1772〜80年)に屋号を「山十 島屋新助」とし、マークの山の形は取扱商品の香を象徴していた。

「島屋は最初、生活必需品を幅広く扱っていたが、次第に専門問屋へ切り替わっ

ていった歴史がある。島商も明治に入って油の専門問屋になり、菜種油、ごま油など主力商品にした。

1917(大正6)年に、ライシグサン石油(現在の昭和シェル石油)の製品を販売する業者の組合「東京買印揮発油組合」の設立に参加。20世紀が「石油と

200年企業

—成長と持続の条件

事業引き際も決断速く

島商、環境分野で先を読む

大正末期の勤務規定

「島田豪就任後、合資会社「島田新助商店」と名乗っていた島商は勤務規定を制定した。「出勤は8時半まで」「正午にいったん出先から戻り、報告すること」給料は一切、前貸ししない」といった内容。震災後の厳しい経営環境を乗り切るため、社内の規律を高める狙いがあったとみられる。1925(大正14)年の「社員相談記録帳」にそれらの規定がみえる。

自動車世紀になることをにらみ、ガソリンを取扱商品に加えた。

のちに9代目になる島田増次郎氏は、関東大震災で改称したシェル石油や、日清製油(現・日清オイル)と同親と店員の大半を亡くし、

たが、終戦後、家業の再興に相次ぎ手を打った。48年にライシグサン石油から増次郎氏に引き継がれた。増次郎氏は、関東大震災で改称したシェル石油や、日清製油(現・日清オイル)と同親と店員の大半を亡くし、

して本業を固め直し、59年、化学分野に進出。シェルの化学製品を卸売りする東部興業(現・東部ケミカル)を設立した。

66年には島商とシェル石油の共同出資で新会社「シエルガデン」を設立。東に増次郎氏の次男の島田孝克・島商社長によれば「父はシェルの情報交換を通じて、高松スーパード間の競争が激しくなると、時代の変化に合わせ、新事業に進出していった。増次郎氏は、島商が持っていた中央シェル石油の株式も売却した。増次郎氏は、先を讀んだ一手だ。撤退も進出も「機をみるに敏」な遺伝子は、今もしっかりと受け継がれている。(編集委員 水野裕司)

ガソリンを系列スタンドにと擴張し、83年、経営を現卸す中央シェル石油販売を在のセンクルトブにゆた設立。同時に増次郎氏は島商の石油販売部門も、シェルの経営権を握る新会社に統合した。石油販売の拡大路線を一転して修正した。その後、10力所ほど持っていた島商直営のガソリンを、同社の年間売上高は約15億円と、約10億円の島商を上回る規模に成長した。孝克社長は知人らと特定非常利活動法人を組織し、東京・自由が丘で、廃食用油が原料のバイオディーゼル燃料(BDE)を使った無料巡回バスを運行している。再生エネルギーの需要増を見越したもので、これ